

論文の和文要旨	
論文題目	大学入試における自由作文問題の 学習と指導への波及効果
氏名	木幡 隆宏

近年、国際社会では英語でコミュニケーションをとる能力だけでなく、批判的思考力や問題解決能力など様々な高度な技能を身につけることが求められている。また、経済協力開発機構(OECD)の国際学力調査(PISA)や文部科学省の全国学力・学習状況調査などの結果から、理解した内容を利用し課題解決のために表現する能力が日本人に不足していることが明らかになっている。これらの経緯を踏まえつつ、新学習指導要領が作成され、英語教育においても、さらなる英語の授業改善、英語教員の指導力向上、教育設備の充実などに加えて、入学者選抜の改善が求められている。この中の入学者選抜の改善については、大学入試が高校での学習と指導に大きな影響を与えているが、必ずしも「話すこと」と「書くこと」の発表技能を測定していないことが課題とされている。本論文では、2つの発表技能のうち「書くこと」を測定する問題に焦点を当て、大学入試の自由作文問題の学習と指導への波及効果を研究対象とした。

テストは指導方法よりも指導内容に大きな影響を与え、同じテストであっても、教師の指導は異なる。しかし、この影響はテストの特性やテストのステイクス、指導に関わる人物の特性、学校環境や教育制度などの要因が複雑に絡み合ってもたらずのものであり、対象となるテストが実施されている環境によってその影響は異なる。先行研究からも、テスト内容からは予測できなかった波及効果が多く確認され、日本の大学入試環境でも同様に予測できない波及効果が存在すると考えられる。

本研究では、まず Green (2007)のモデルを用い、大学入試の自由作文問題と高校の教育課

程を示す学習指導要領の重なりから受験者の学習と高校教員の指導への正と負の波及効果を予測した。その後、受験者の学習と高校教員の指導について調査し、予測された波及効果が実際に起こっているかを確認し、波及効果に影響を与えた要因について検討した。これらを遂行するため3つの調査を行った。

調査1では、大学入試の自由作文問題を分析した。分析にあたっては、2007年度に実施された177大学の239学部・学科の入試問題を対象とした。分析結果と学習指導要領内容の重なりを確認したところ、7つの波及効果が予測された。学習への影響としては、自由作文問題を出題する大学の受験者に自由作文を書く学習を促進するという正の波及効果が予測された。指導への影響としては、まず自由作文指導の機会を抑制すると予測された。また、特定の読み手を想定しない意見型のエッセイに偏った指導に偏り、統合的なライティングがあまり行われなことが予測された。

調査2では、大学入試で自由作文問題を出題している2つの大学(A大学とB大学)に所属する大学新入生33名を対象にインタビュー調査を行った。また、A大学に所属する大学新入生119名にアンケート調査を行った。インタビューおよびアンケートでは、受験大学の入試対策を開始した時期や、自由作文問題対策方法などについて質問した。調査の結果、予測された波及効果「自由作文問題が出題されている大学を受験する学習者に自由作文を書く学習を促進する」が支持された。自由作文問題対策開始時期に関しては、参加者のほとんどが高校3年生時に開始していたが、春、夏、秋、センター試験後と開始時期は様々だった。対策方法に関しては、塾や予備校、高校の補習の他、個人で学習する方法が多くとられていたが、自由作文問題を解き、先生などに添削指導をしてもらうという学習が中心で、他の対策方法はほとんど引き起こさなかった。

調査3では、33校の高校から129名の英語教員名にアンケート調査を実施した。アンケート項目は、主に授業内での教材使用、授業内での大学入試自由作文問題対策、授業の評価としての自由作文の採点基準、大学入試の自由作文問題で使用されていると考える採点基準像、大学入試の自由作文問題対策として行っている添削指導に関する質問で構成された。回答の分析、検討の結果、予測された波及効果のうち、「高校の授業で自由作文指導をする機会を抑制する」波及効果が多くの教師に確認されたが、一部の教師にはこの影響が見られなかった。影響を受けている教師は、特に教科書の分量の多い作文活動を扱わず、より文法や語彙、表現に関する活動を扱う傾向にあった。また、「日本語を英語で書くことを最終目標とした指導を促進する」と「意見型の文体に偏った作文の指導をもたらす」波及効果は否定された。そ

して、「統合的な作文の指導を抑制する」と「エッセイのジャンルに偏った作文の指導をもたらす」、「特定の読み手を想定しない作文に偏った指導をもたらす」指導が確認できた。

次に、本研究で確認された波及効果をもたらした要因について検討した。まずテスト要因に関しては、様々な大学入試問題が存在する中で、多くの大学で自由作文問題が出題されないことの影響があったと示唆された。また、読み手の設定や文体、ジャンルなどの自由作文問題の特徴の影響は確認できなかった。同時に、採点基準を公開している大学はないが、今後公開された場合、添削指導や授業で使用する採点基準に影響を与えることが示唆された。テストの名声要因に関しては、高ステイクスである大学入試は、学習と指導に強い影響を与えていたものの、波及効果には個人差も見られ、名声要因よりも他の要因の方が大きく関わっていることが分かった。受験者個人の要因については、個人の学習動機と生活環境が関わっていた。大学入試対策への学習動機の高い受験者は少数ではあったが、早い時期から準備を始めていたり、過去問や問題集を解く以外の方法を試みたりしていた。また、進級や夏休み、部活の引退などをきっかけに受験勉強を開始する受験者や、帰国子女であることを理由に特別な対策学習をしなかった受験者がいるなど、高校や家庭での生活環境も受験対策学習に影響を与える要因になっていた。そして学習方法においては、受験者個人よりも教師や問題集・参考書の要因が強く影響していた。教師個人の要因については、教師の大学入試問題の解釈と判断が波及効果に関係していると考えられた。教師は、様々な種類の大学入試問題と公開されていない採点基準を自分なりに解釈し指導に取り入れている。また生徒の受験大学や能力、所属高校の方針など様々な状況を踏まえて、指導内容や方法を教師個人が判断、決定しなければならない。ミクロ背景要因として、高校全体の指導方針が挙げられた。授業内容に大きく関わる教科書の選択や副教材は、教師個人ではなく高校全体として決定され、高校によっては配布資料や活動内容まで決定されていることもあり、教師個人の要因よりも大きな影響を与える場合もある。マクロ背景要因としては日本の大学入試制度が挙げられ、センター試験と各大学の個別試験の様々なテストの存在が波及効果をより複雑にしていると考えられた。

また、Green (2007)の波及効果モデルの修正案を提示した。波及効果モデルの修正案については、Green のモデルでは、テストと教育課程の重なる部分によって正と負の波及効果が起こる可能性があることを示していたが、実際のテストそのものではなく、対象者が持つテストイメージを組み込んだモデルを提示した。教師などの対象者は、サンプル問題や過去問題を対象者が分析したり、問題の出題意図などの公開されていないテストの情報を想像した

りした結果、テストのイメージを形成し、そのイメージを元に指導や学習を行っていると思定される。さらに、そのイメージの形成には、テストの過去問題やサンプル問題以外に、他の教師や出版社などの仲介者が関係していると考えられる。

調査結果と考察を元に、大学の独自試験問題作成への示唆として、有益な波及効果をもたらすために実行されるべき改善点を提案した。その提案は、「自由作文問題を出題すること」、「自由作文問題のテスト細目を作成し、事前に公開すること」、「与える情報、ジャンル、読み手が異なる自由作文問題を複数出題すること」である。これによって、学習指導要領の目標達成のための指導が促進されることが期待される。